

キャンパス の記憶

— 湘南キャンパスの歴史 —



はじめに

湘南キャンパスは1963年に開設されました。学校法人東海大学の創立者・松前重義は、この地を本学の“永遠の礎”と位置づけ、新しいキャンパスの施設を整えるとともに、総合大学としての組織の充実を図りました。

この松前の理想と教育理念を、施設面で一手に支えたのが、松前の盟友で、学園の理事や工学部教授を務めた建築家・山田守です。山田は松前の構想を具現化すべく、キャンパスのグランドデザインと建物の設計をただけでなく、土地の確保、建築資材や資金の調達、役所との交渉など、多岐にわたって奔走しました。

この二人の理念と理想を脈々と継いで、湘南キャンパスは現在も発展し続けています。

都心から離れている上に、駅からも少し離れている湘南キャンパス。現在の感覚では「アクセスが悪い」と思われるかもしれませんが、しかし、そこにこそ松前の意図——教育理念が込められているのです。

なぜこの場所にキャンパスを建設したのか。キャンパスとその周辺はどのように発展していったのか。学生たちはどのような青春をこのキャンパスで謳歌し、巣立っていったのか。そんな疑問の一端を、キャンパスの歴史から紐解きます。

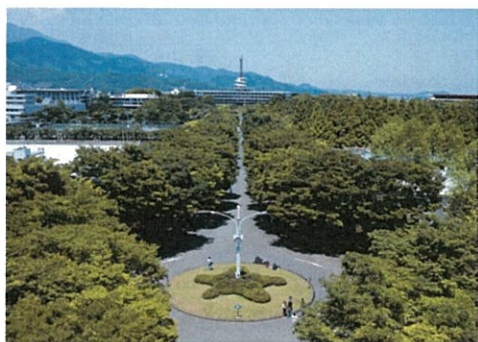
◎湘南キャンパスMAP



◆東海大学湘南キャンパス◆

文学部、政治経済学部、法学部、教養学部、体育学部、理学部、情報理工学部、工学部、観光学部の9学部の学生・大学院生およそ2万人が学ぶ、東海大学のメインキャンパスです。

起伏に富んだ丘陵地を生かした校地は約54万㎡（東京ドーム約12個分）。キャンパスの高台を東西に貫く「富士見通り」沿いには、ユニークな形状の建物がずらり。もう一つのメインストリート、南北に走る「中央通り」は本学が誇るケヤキ並木です。2014年12月には平塚市景観重要樹木に指定されました。



表紙写真：中央通り、南門付近から北側、1号館方面を望む。1990年ごろ撮影。



松前重義
(1901—1991)



山田守
(1894—1966)

◎この冊子は学校法人東海大学学園史資料センター主催の展示会「キャンパスの記憶—湘南キャンパスの歴史—」（共催：東海大学教育開発研究センター、会場：神奈川県平塚市北金目4-1-1 東海大学湘南キャンパス5号館2階 学園史資料センター展示室、会期：2016年3月24日～9月30日）の図録です。

湘南キャンパス前史

1942年に財団法人国防理工学園の設立が認可され、学園は創立しました。翌1943年には東海大学の前身である航空科学専門学校が現在の静岡県静岡市清水区で開校します。戦後すぐの1946年に旧制東海大学が開校し、1950年に現在の新制東海大学となりました。

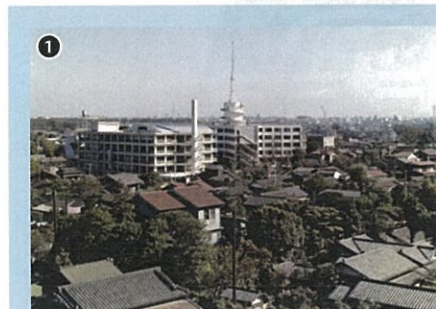
戦後の経済的混乱や学制改革による大学の急増などで、本学の学生数は減少し、経営は悪化の一途をたどります。この危機的状況を抜け出すために、創立者・松前重義とその同

志たちは1955年、東京都渋谷区富ヶ谷、代々木の地への移転を決断しました。起死回生を図った新天地、それが現在の代々木キャンパスです。

その後、日本は経済成長期に入り、本学も再建の軌道に乗ります。進学率の増加という追い風を受け、学生数は急増。代々木だけでは手狭になりました。静岡県・清水や神奈川県・相模原（現在の付属相模高等学校の敷地）に新たなキャンパスを開設しますが、それでもまだ足りません。松前はこの時のことを、「本学の永

遠の礎となる新しいキャンパス用地確保の必要に、迫られた。」と、懐述しています。そうして、神奈川県の西部、現在の湘南キャンパスの地に目をつけるのです。

- ① 学生募集に苦しんだ学園は1955年、東京・渋谷への移転を執行する。1958年にはFMラジオ放送用のアンテナを設置。住宅街に位置する代々木校舎の目印となった。
- ② 1962年、海洋学部開設に合わせて清水市折戸に「折戸校舎」を開設（1966年から「清水校舎」と改称）。当初は写真に写っている旧東京商船大学の建物を使用していた。
- ③ 1962年4月に開設された相模校舎には、鉄筋コンクリート3階建ての校舎2棟があり、文学部と工学部、海洋学部の教養課程の教育が行われた。翌1963年から付属相模高等学校の校舎に転用。



◎湘南キャンパス開設計画——なぜこの場所なのか？

建学の地である清水キャンパスの立地は、「富士を仰ぎ、太平洋を望み、都会の雑踏を避けた」、まさに松前の考える理想の教育環境でした。

湘南キャンパスについて松前は、「私は下見に行って、すっかりこの土地が気に入った。東にはるか江の島を望み、西に富士の高嶺を仰ぎ、北に丹沢の連峰をいただく景勝の地

である。」と述べています。

清水キャンパスと同じように、湘南キャンパスも、自らの理想とする教育・人材育成にふさわしい自然環境だと感じたのでしょう。

加えて松前は、「小田急線大根駅（現在の東海大学前駅）から徒歩で、わずか10分。富ヶ谷（代々木キャンパス）に比べれば不便だが、都心

から1時間半ぐらいで通学できる。」と述べています。

学生の募集は私学経営の根幹ともいえる重要事項。清水ではこの面で苦勞し、移転を余儀なくされるまでに追い込まれた過去があります。その轍を踏まないように、湘南キャンパスの校地は将来を見据えて選定されたのです。

グランドデザインと建設計画

1962年5月に行われた本学園の理事会で、神奈川県平塚市郊外の土地およそ43万㎡の買収と、土地の利用計画、建設する校舎の計画に関する決定がなされました。多くの地主が「文教地区になるならば」と、先祖代々の農地を手放してくれました。

この校地提供者210名に謝意を表すため、その名前を刻んだ石碑が、現在も1号館北側、北門を出てすぐ

の歩道脇に建っています。

1号館（当初は「本館」）の建設工事は同年11月から始まりました。1号館を含め、湘南キャンパス全体のデザインを手掛けたのが建築家・山田守です。「日本武道館」（1964年竣工）や「京都タワービル」（同）等を設計した、近代日本を代表する建築家として知られています。

湘南キャンパスのグランドデザインの特徴は、単に機能美を求めただ



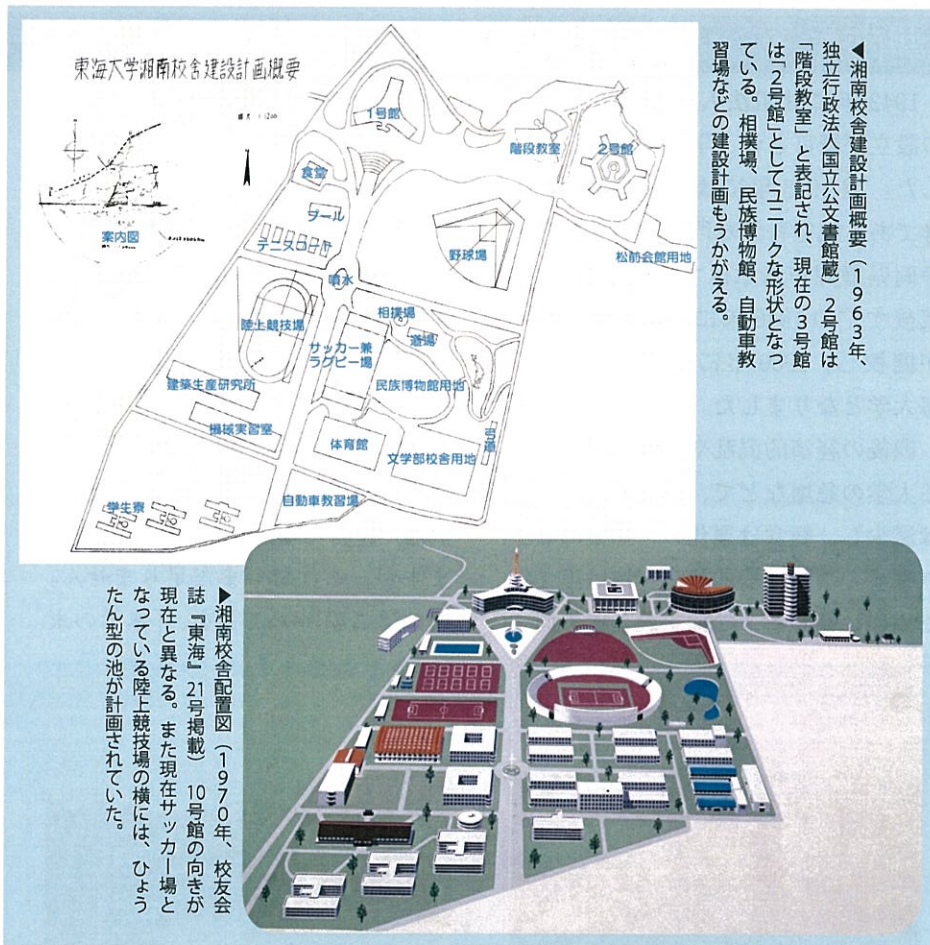
▲北門を出てすぐの歩道の脇、銅製の銘板（写真左）に校地提供者210名の名前が刻まれている。写真右は「望星塚」の記念碑。

けでなく、キャンパスとしての景観美を追求した点にあります。中心軸

となる「中央通り」と「富士見通り」の二つの大通りに面して、建物や施設を統一的に配置しました。また、高台の富士見通り沿いに1、2、3号館といった独特なフォルムをもつ建物を配置してシンボル性を高めています。さらに多くの樹木を植え、自然の美しさを景観の中に取り入れようとしています。

湘南キャンパスは、松前の教育理念を山田が具現化した“作品”と言ってよいでしょう。そのランドデザインは当初より大きな変化はありませんが、建物の形状や施設の種類の、また配置などは試行錯誤を重ねられてきました。

その設計者である山田は、建設真ただ中の1966年に逝去し、建設計画にとって大きな痛手となりました。しかし、その悲しみを乗り越えて、湘南キャンパスは現在の姿となったのです。

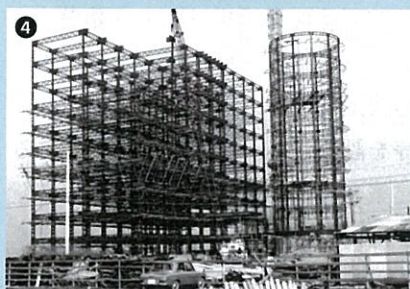


進む建設——1960年代

1962年11月から始まった1号館の建設工事は、山田守がモットーとした「早く、安く、立派なもの」を合い言葉に、昼夜兼行で進められました。翌1963年5月8日の竣工を待たずに新年度の講義が開始され、竣工後も屋上では鉄塔の施工が続きました。

1964年からは改めて、湘南キャンパス整備に向けた「第1次5カ年計画」が実施され、同年12月には2号館も竣工します。計画は順調に進み、1968年までの5年間に、5号館までの建物と各種実験・実習・研究施設や学生寮（湘南望星学塾）、陸上競技場や武道館、総合体育館と

- 1963年2月22日、開校挨拶会で現地参観が行われ、松前重義が海外からの来訪者にキャンパスの構想を説明。写真右は建設中の1号館。
- 1963年6月8日、湘南校舎の竣工披露式で撮影された写真。1号館は5月8日に竣工したものの、その後も工事を継続。1カ月後の披露式となった。しかし、式の際にはまだ鉄塔が設置されておらず、完成にはさらに数カ月を擁した。
- 1963年撮影。1号館の1階がピロティだったことが分かる一枚。1号館の左手前に写っているのがキャンパス開設当初からあった食堂。後に「第1食堂」と呼ばれた。1965年には第1食堂の北側（写真の位置関係では奥）に第2食堂ができるが、ともに取り壊され、1970年に8号館が竣工。
- 1966年、建設の進む3号館。キャンパス南側に実験・研究設備の整備が進んでいた理工系とのバランスを取るため、文化系が利用する施設としてキャンパス北側に建設された。
- 1965年ごろ、整備が進む正門周辺。正門のある通りはキャンパスと神奈川県道62号平塚秦野線をつなぐ道路で、早い段階から工事が進められた。この通りが従来あった道を分断してしまったため、橋を建設した。



いった運動施設のほか、食堂などの
アメニティ施設が“郊外型キャン
パスの先駆け”として整備されてい
きました。

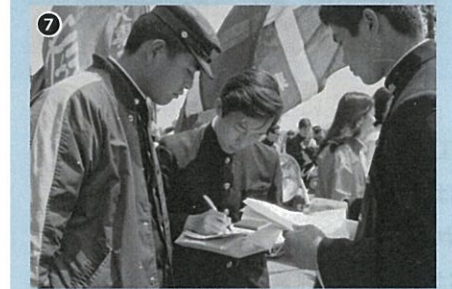
1967年には1号館正面（南側）
の斜面に、山田守から寄贈された噴
水を設置した噴水池（通称「山田噴
水」）が完成。さらに学内の緑化と、
中央通りや富士見通りの舗装が進め
られました。

このうち2号館、4号館周辺から
中央通り両側の歩道、松前会館の庭
などに敷かれた石は、かつて東京都
電車（「都電」と通称された路面電車）
の敷石として利用されたものです。
1962年当時、東京都は自動車の普
及と地下鉄の発達を受けて、また東
京オリンピック開催に向けた道路整
備の一環として、いくつかの都電を
廃止し、その敷石の処分を検討して
いました。この情報を得た山田が湘

南キャンパスでの再生・活用を提案
したのです。都との交渉の末、銀座
線、築地線、新宿線などの敷石をほ
ぼ無料で譲り受けることとなりました。
その数は約3万5千枚にのぼり
ます。山田の機転によってキャンパ
スの環境整備は飛躍的に進んだので
す。

湘南キャンパス開設当時はまだ、
周辺も含めて道路が舗装されていま
せんでした。晴れの日には砂ぼこり
が舞い上がり、雨が降れば長靴がな
ければ歩くこともままならない、劣
悪な環境だったのです。学生たちは
皮肉を込めて、“湘南砂漠”と呼ん
でいました。

それが、この1960年代の約8年
の歳月で、砂漠の面影は消え去り、
若者たちが学問を究め、研究に勤し
み、青春を謳歌するにふさわしいオ
アシスへと変貌^{へんぼう}を遂げたのです。



- ⑥ 1968年ごろの噴水池。噴水は当時の消防法にかなった防火設備として、山田守から寄贈されたもの。およそ50mの高さにまで吹き上がった。
- ⑦ 1968年4月15日、入学式後、富士見通りでのクラブ勧誘の様子。総合体育館がまだないため（1968年8月竣工）、入学式は2号館で実施。当時の新入生は主に学生服を着用していた。
- ⑧ 「湘南望星学塾」。塾生が行っていた、朝のデンマーク体操。右後方に円形食堂。同塾は松前重義が東京都武蔵野市に開いた私塾「望星学塾」の精神を受け継ぎ、1964年に開設。教職員と学生が寝食をともにして、人間形成を図った。現在のJ館、K館、L館を使用していた（1974年3月まで、写真は1970年ごろ撮影）。なお、女子が入寮する「女子望星学塾」（1968年4月～1974年3月、現在の国際会館を使用）、体育会所属の男子学生が入寮する「体育望星学塾」（1967年4月～1993年3月、現在の湘南クラブハウスを使用）もあった。
- ⑨⑩ 敷設当初の敷石⑨と、現在の敷石⑩。目地が沈下し、歩きにくくなったため、1999年に化粧直しが施された。
- ⑪⑫ 湘南キャンパスの航空写真。1965年撮影⑪と、1970年撮影⑫。この間に3～10号館が竣工するなど整備が進んだ。

紛争と環境の充実——1970～1980年代



1970年度に10号館と6号館が竣工して以降、湘南キャンパスではしばらくの間、大規模な建物は施工されませんでした。この時期、学園では1973年に阿蘇キャンパスが開設、1974年には伊勢原キャンパスが開設するなど、湘南以外で建設ラッシュが続いた影響もありました。

1970年には全国的に起こった学園紛争（学生運動）の波が湘南キャンパスにも押し寄せます。構内での騒動に発展したため、大学は3度にわたりキャンパスを封鎖し、休講措置を取る事態となりました。

それまで湘南キャンパスには構内

と外とを隔てる柵がなく、自由に行き来することができましたが、紛争の影響でキャンパスの周囲に鉄柵が張り巡らされました。そして大学は学生の生活や動向を調査・研究するため、現在の「教育開発研究センター」（旧「教育研究所」）を設立して、教育活動や教育環境の発展・充実を図るようになります。

キャンパスでは噴水池北側に「星を仰ぐ青年の像」が設置され、当初計画ではひょうたん型の池にする予定だった陸上競技場の東側にサッカー場が造られました。

また1972年には小田急線大根駅

① 1970年、学園紛争の影響で6月から11月までの間に湘南キャンパスは3度の封鎖・休講措置を取った。写真は北門付近での騒動。

② 1960年代後半の2号館周辺。当時は大学構内と外部とを隔てる鉄の柵がなかった。現在と比較すると周囲も広々として、芝生も多いことが分かる。左後方に「体育望星学塾」（現「湘南クラブハウス」）が確認できる。

③ 1970年代の小田急線「大根」駅（現「東海大学前」駅）。当時、上りホーム（新宿方面）に向かうには、改札のある駅舎を通過してから線路を渡る必要があった。現在のような橋上駅舎になるのは1987年3月9日。同時に駅名が変更された。

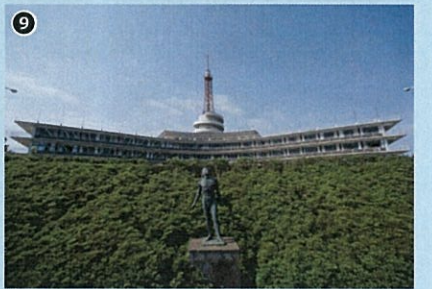
④ 1978年、掲示門周辺の様子。インターネットや携帯電話のない時代。学生たちはまず掲示板で休講情報などを確認していた。女子のスカートの丈やヘアスタイルに当時の流行が表れている。

⑤ 1980年ごろ、11号館建設工事風景。現在11号館が建つキャンパス北東から縄文時代後期を中心とする遺構・遺物「王子台遺跡」が発見され、文学部が中核となって発掘調査を行った。

⑥⑦ 1988年2月、一般入学試験の様子。当時はすべての受験生に筆記試験に加え、面接と作文を課していた。志願者が多かったため試験期間は入構が禁止されたほか、試験教室の不足から総合体育館を試験会場に使用した。

⑧ 1980年代後半、体育の講義風景。東海大学では古くから、低学年次で体育の講義が必修となっている。広大な湘南キャンパスは、体育の講義環境が整っていることも特徴の一つ。

⑨⑩⑪ 噴水池周辺の様子。⑨は池の北側に「星を仰ぐ青年の像」が設置されていた時代（1971年ごろ～1988年）。⑩は1985年ごろ、池周辺の石畳は学生たちの憩いの場だった。⑪は1988年、日本庭園風に改修され、和服姿の松前重義像が建立された。



(現在の東海大学前駅)に急行が全面停車するようになり、学生たちの通学の便が向上しました。

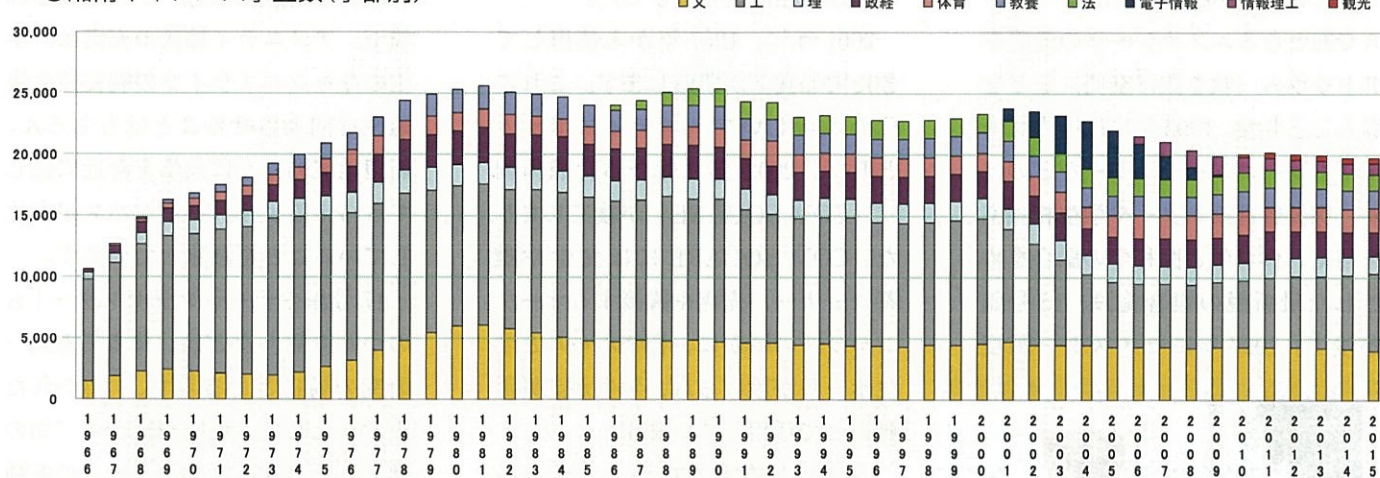
1970年代半ばから学生数が急速に増加し、湘南キャンパスに通う学生は2万人を突破しました。特に文学部の学生増への対応策として1981年、約10年ぶりの新築となる

11号館が竣工します。1986年には工学系の12号館、1988年には教養学部の13号館が相次いで竣工。11～13号館には各専門の図書館分館が設置され、時代にあった教育・研究のための環境が充実していきました。

さらに1988年には噴水池周辺が

日本庭園風に改修され、和服姿の「松前重義銅像」が池の北側に設置されました。それに伴い「星を仰ぐ青年の像」は総合体育館南側に移設。ちなみに、現在のスーツ姿の「松前重義銅像」は1990年に設置されたもので、和服姿の像は熊本の松前重義記念館に移設されています。

◎湘南キャンパス学生数(学部別)



学生食堂の変遷

湘南キャンパスが1963年に開設した当初、学生食堂は1カ所しかありませんでした。その後、第2食堂(1965年5月～)、円形食堂(1967年3月～)、2号館地下食堂(1969年4月～)などが次々にオープンします。

校内の学生食堂とともに、キャンパス周辺にも多くの飲食店が開店し、学生の食生活は次第に改善、充実していきました。

キャンパスの北西、北東、南側、そして中央と、食堂が置かれる場所も重要です。各エリアで施設の更新が進み、北西エリアでは第1、第2食堂の跡地に8号館食堂(1970年1月～)が、北東エリアでは2号館地下食堂に代わる11号館食堂(1981年4月～)が、南エリアでは円形食堂の後を受けてCOM SQUARE(2002年2月～)が、それぞれオープンしました。

キャンパス開設からしばらくは、増加する学生の数に対応するため、いかに座席数を増やすが学生食堂整備の主眼となっていました。

1990年代に入ると座席数拡充の問題が落ち着きを見せはじめ、それ以降は食事をする空間・環境の多様化が図られるようになります。

木立の中にたたずむロッジ風建築の「ログハウス」(1990年3月～)(右上写真)をはじめ、カフェテリア形式を採用した14号館カフェラウンジ(1992年9月～)、オープンデッキを備えたカフェテラス(ドトールコーヒーショップ、2008年10月～)など、個性的な食堂がオープン。学生たちは食べ物の味だけでなく、施設ごとに異なる空間の雰囲気も味わえるようになりました。

気になるお値段について。湘南キャンパス開設の約半年前、1962年10月に代々木校舎の食堂が新装開店します。当時



カレーライスが55円、ランチは70円(昼定食は50円)でした。1963年春、開設当初の湘南キャンパスで出されたメニューも同程度の値段だったと思われます。

2016年3月現在、8号館レストランのカレーライス(ビーフカレー)は330円。約50年で物価が上がり、6倍の値段になりました。

なお、8号館レストランでは現在、いわゆる「ランチ」や「定食」と呼ばれるセットメニューはありません。ライス(200g=110円)、味噌汁(50円)に5種類ほどのメインディッシュ(例えば「白身魚のフライ=190円」)から自分の好みの物をチョイスできます。

近代化と地域連携——1990～2000年代

1991年、創立者・松前重義が逝去します。学園は大きな柱を失いますが、創立者の遺志を引き継ぎ、前進していきます。湘南キャンパスもまた、時代に合わせて発展してきました。

1992年に文化系の教室棟として竣工した14号館は、湘南キャンパスで初となるエスカレータの設置やアトリウム（吹き抜け空間）などを導入しました。1995年には屋内プールやトレーニングセンターなどのほか、保健管理センターや学生相談室を備え、体育学と医科学の融合をめざした最新鋭の複合施設、15号館が竣工。1997年にセメスター制度

（2学期制）の導入で不足する理工系の教室棟として16号館が、2000年には理工系分野における先端的研究・教育の拠点として17号館が、相次いで竣工します。特にこれらの教育・研究施設は、制度や時代に合わせた最先端の設備が取り入れられ、近代化が図られました。

2001年に、1967年から使用してきた円形食堂が閉館します。これに代わる新しいアメニティスポットとして、2002年に総合体育館南側に「COM SQUARE」が竣工しました。COM SQUAREには食堂や喫茶コーナー、売店や隣接するオープンテラスのほかに、音楽ホールと学生ホールが設けられ、学生が課外活動などで活用しています。

また円形食堂を改装したチャレンジセンター「ものづくり館」が2006年に開館。国内外の大会で活躍する本学のソーラーカーチームも

ここを拠点としています。

2007年には9号館に隣接する研究実験館D館の南側にコンビニエンスストア併設の休憩スペース「REFRE」が、2008年には8号館東側に屋外席「PAL SPOT」が、中央通りに「カフェテラス」（ドトールコーヒESHOP東海大学店）が、それぞれ竣工。アメニティ施設の充実は、学生のキャンパスライフの利便性や快適性を向上させることはもちろん、周辺地域の方々に大学を身近に感じてもらえるよう、キャンパスが変化していることを意味しています。

17号館やチャレンジセンター「ものづくり館」などは、単なる教育・研究の場にとどまらず、「開かれた大学」として、地域や社会の“知の拠点”となり、コミュニティの多種多様な活動を支えていくことを目指した施設です。17号館は産学連携の拠点として社会貢献に活用されています。またチャレンジセンターは社会と連携した実践的な教育や、地域活性・社会貢献活動を展開するなど、学生たちが自由な発想で地域とつながる拠点となっているのです。



① 1992年11月、学園は建学50周年を迎え、大規模な記念事業を実施。湘南キャンパスでも11月1日に記念式典を開催し、その年の建学祭は大盛況となった。

② 15号館内にあるスポーツ医科学研究所の低圧室（人工的高地トレーニングシステム）。陸上の長距離選手や野球の投手などに必要な、スタミナを鍛錬することができる。

③ 2000年9月25日、17号館竣工式の後、館内を視察する松前達郎総長・学長（左から2人目）と高野二郎副学長（左端、ともに肩書は当時）。

④ 2008年8月、チャレンジセンター所属の学生らが神奈川県・湘南の平塚海岸に建設したビーチ



ハウス。

⑤ 2012年11月、国際大会5連覇を達成したソーラーカーチームが凱旋し、キャンパス内で走行会。

⑥ チャレンジセンター「ものづくり館」館内の様子。ソーラーカーのほか、人力飛行機やフォーミュラーカーなどの整備がここで行われている。



未来へ——2010年代

2014年、18号館が竣工しました。理工系学部の教育・研究施設として建設されたもので、最先端の省エネルギー技術や高い耐震性能を持つ免震構造が導入されています。

その特徴は、学生同士、また学生と教員とのコミュニケーションを促す施設が多く設けられている点です。例えば、1階には自学自習スペースの「サイエンス・アトリウム」やグループ学習室を設置。研究室フロアにあたる5～8階には、休憩や雑談から情報交換、ディスカッションまで、誰もが自由に利用できる多目的スペース「ユニバーサル・プレート」や学生用ゼミ室などが設けられています。

2015年には研究実験館A・B館(1965年竣工)を取り壊し、その跡地に19号館(仮称)の建設を開始しました。2017年4月の利用開始をめざす19号館は、主に情報理工学部と工学部が使用する予定で、社会の変化に即応できる人材を育成するための空間を集約し、学生が互いに刺激し合える空間づくりをコンセプトに設計されています。学生交流スペースやカフェステーションを設置するほか、アクティブラーニング型授業に使うラーニングコモンズ、

グループで新たな課題に挑む学生向けのプロジェクト室、理工系工房などを設ける予定となっています。

18号館、19号館とともに、学生のコミュニケーション力やコラボレーション力を養い、世界で活躍できる人材を育成するための建物です。本学がめざす「国際レベルでの研究拠点」を具現化する施設と換言してもいいでしょう。

国際的なキャンパスづくりの一環として、2015年には「カフェテラス」が「インターナショナルカフェ」となりました。店内はメニューや掲示板、流れているテレビ番組も、すべてが英語です。スタッフが接客で話す言葉も英語を使用します。増加する留学生向けのサービスを充実させるとともに、日本人学生たちが授業だけでは学ぶことのできない異文化

コミュニケーションを通じて、国際理解を深めることが期待されています。大学構内の飲食施設を「完全英語化」とする試みは、日本ではあまり前例のない取り組みです。

東海大学は世界で活躍できるグローバル人材を育成し、国際レベルでの研究拠点を確立して、国際的な大学——グローバルユニバーシティの構築を目指しています。そのために湘南キャンパスは、新たな施設の建設といったハード面の整備とともに、教育や研究、社会貢献・地域連携などソフト面での充実も図り、進化し続けているのです。



① 2014年3月7日に竣工式が行われた18号館は、建学75周年記念事業の一環として建てられた。地上8階建て、延べ床面積14,204.04㎡。柱の一部には学園のイメージカラー「東海ブルー」があしらわれている。

② 18号館1階にある「サイエンス・フォーラム」。館内の研究室、実験室、ゼミ室、院生室などの通路に面している部分はドアを除いてすべてガラス張りになっている。

③ 18号館1階の自学自習スペース「サイエンス・アトリウム」。教育支援センターと連携し、高学年次生や大学院生を「ラーニング・サポーター」として配置、低学年次生の学習を支援している。

④⑤ 19号館完成予想図。2017年4月利用開始予定。地上10階建てで、1～3階部分は吹き抜け。1階に学生が自由に集えるラウンジやカフェステーションを設置予定。

⑥ 2015年9月からカフェテラスは完全英語化の「インターナショナルカフェ」に。

⑦ 湘南キャンパスの夏の風物詩、学園オリンピックのスポーツ大会が、2015年8月の開催で50回の節目を迎えた。学園の付属校生を対象に、若き才能の早期発見と育成等を目的に実施しているもの。生徒たちは同じ建学の精神を持つ他校の仲間や大学生と交流し、学園のスケールと魅力を体感している。



校舎石膏模型

湘南キャンパスに建つ、ユニークな形状の校舎群。中でも1号館から4号館といった初期の建築物は、日本を代表する近代建築家・山田守が設計したもので、建築界でも高く評価されています。

机上での設計と、実際の施工とをつなぐ重要な資料が、ここで紹介する石膏模型です。平面のデザインを



広大な湘南キャンパスの北西高台に今もそびえる「1号館」は、1963年5月8日竣工。構内で最も早く建てられた建物です。真南に玄関を向けたY字型の独創的な外観は、山田建築の代表作といえます。また曲線・曲面を駆使した造りは、山田作品の最大の特徴でもあり、湘南キャンパスのシンボルと呼ぶのにふさわしい建物です。

山田建築の代表作ともいべきこのY字型の建造物は、中央の正六角形から三方向に射出する三つの翼を持つ構造です。「東京厚生年金病院」(1953年竣

立体造形物として表現したこれらの模型が、建設に移る前の検討に使われることもありました。

模型と、現在キャンパスに建つ実際の校舎との間には、形状が異なる部分も散見されます。もちろん、後年の改修などによって当初の形状に変更が加えられる部分もありますが、そうした違いに注目するのも面白いでしょう。

また、構想だけで終わった幻の円形体育館(屋内体育館)にもご注目を。実現こそしませんでした。山田が湘南キャンパスに思い描いた夢を、皆さんも追想してみてください。

工)において初めてそのデザインが用いられました。日照・通風上有利であるとともに、保守や修繕にも便利という合理的な面も持ち合わせています。また、非常時には各階に設けられたバルコニー兼庇を伝って、各翼の端の階段から避難できるようになっています。

模型が示すとおり、構想段階では5階建てでした。構造計算もその案に沿ってなされましたが、実際には工期短縮や費用削減といった理由から4階建てとなりました。また模型から、竣工時は1階部分がピロティ(独立した柱で上階を支える吹き放しの構造)だったことがわかります。この部分に教室等を設ける改修は、1965年に行われました。

その他、一目で分かる模型と実際の建物の違いは、模型には鉄塔がないこと。さらに塔屋と玄関上部に突き出た庇の縁(模型では柵)の処理方法も異なります。

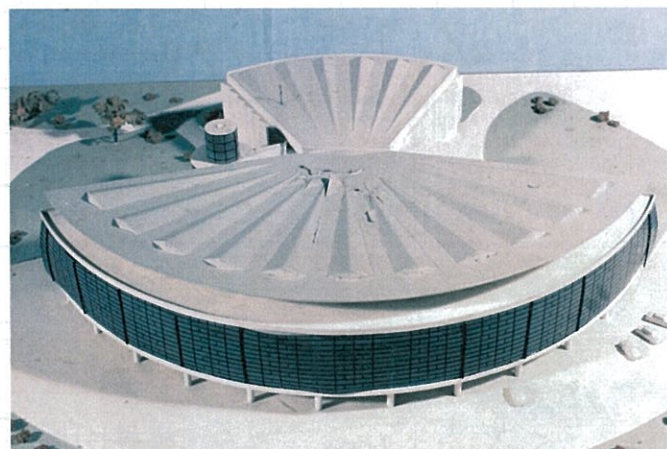
なお、キャンパス開設当初から2号館が竣工する1964年末ごろまで、1号館は「本館」と呼ばれていました。

2号館

大小の扇が要の部分で結合した形状の「2号館」は、その独特の外観や内部施設から「扇形教室」「階段教室」とも呼ばれています。

1962年に欧米諸国の大学を視察した松前重義は、日本に比べて遥かに進んだ技術者養成の実態をつぶさに見聞。その影響から、日本におけるマスプロ教育(多人数教育)の充実を強く志向するようになりました。2号館は、その新しい教育を実現する施設として構想され、1964年12月に竣工します。

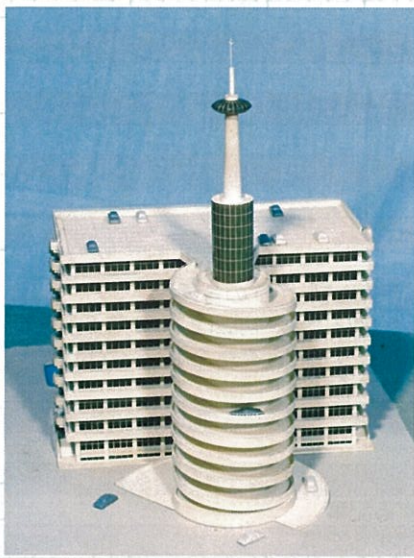
構造は屋根を除いて全て鉄筋コンクリート構造。南側にある大ホール(「2S-101教室」)は固定席で約3,000名、4階の補助席をあわせれば約3,500名を収容できます。北側の小ホール(「2N-101教室」)の収容人数は約1,000名。どちらもステージから遠ざかるにつれて机と座席が高い位置に置かれる、いわゆる「階段教室」です。



大ホールには竣工当時最先端の視聴覚設備だった「アイトホール」(大型スクリーン・テレビジョンシステム)が設置され、多人数による視聴覚教育の画期的な施設として各方面から注目されました。

3号館

1966年11月に竣工した「3号館」は、地上10階（地下1階）の高層建築



です。円筒形の構造物の外通路となるらせん状のスロープには当初、自動車の通行が可能な幅が持たせてありました。現在は2011年度末に完了した改修に伴い、柵を設けたため幅が狭くなっています。また、屋上を駐車スペースとする構想があったことが模型から分かります。

模型には円筒の頂部に「京都タワービル」（山田が設計、1964年）に似たタワーが載っていますが、当初は何もありませんでした。現在は各種通信用のアンテナが建っています。さらに現在は北側に建つ14号

松前会館



館（1992年竣工）と1階、4階部分で接続していることもあり、竣工前の構想も含めた状態が確認できる貴重な模型といえます。

3号館とセットで模型が作られた「松前会館」は1966年10月に竣工。学生や教職員、校友が利用できる集会・宿泊施設です。こちらの外観にも多彩な曲面や曲線が使用され、山田のこだわりや獨創性が色濃く反映されています。

4号館



地上4階、地下1階建ての「4号館」は、本学の25周年記念事業と同時期、1967年12月に竣工しました。

山田守は生前、「事務、学局、図書館及び教授の研究室にあてる予定」と説明しています。図書館を中心にした構造で、積層式の書庫スペースにより多数の蔵書収納

が可能です。

落成時、既に山田は他界していましたが、ギリシャ神殿を彷彿とさせる外観は、「北陸銀行本店計画案」（1953年）や本学「代々木校舎1号館」（1955年）、「北陸銀行浅草支店」（1958年）にも見られ、山田の設計思想を紛れもなく受け継いでいるといえます。

武道館

山田守の設計による東京・北の丸公園の「日本武道館」（1964年）は、国内外を問わず多くの人々に感銘を与えました。その経験が湘南キャンパスの「武道館」に生かされたと言われています。

本学体育学部の将来の拠点として、また全学生の体躯錬成の道場として、その構想は次第にふくら

んでいきました。最終的に総面積は3,400㎡、純日本様式で京都の「三十三間堂」を思わせる、雄大かつ華麗な建物となっています。

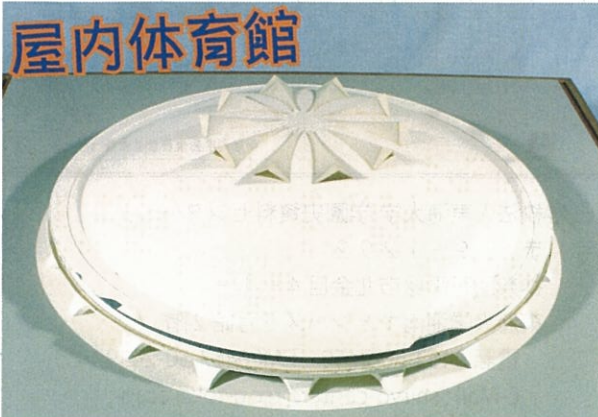
山田は病床で「武道館はどこまで出来たか」と毎日

のように周囲に質問をし、病身を押しつけて建設現場に赴こうとするほど気にかけていたと伝わっています。



山田が逝去した1966年6月からほどない同年10月に竣工し、現在も多くの武道家を育成しています。

屋内体育館



1965年ごろの湘南キャンパス計画図には、「総合体育館」を円形のドームとする構想がみられます（最終ページ参照）。

模型として残る「屋内体育館」の屋根には、換気口と思われる突起が放射状に配置されています。左ページで紹介した「2号館」の屋根と似た意匠です。

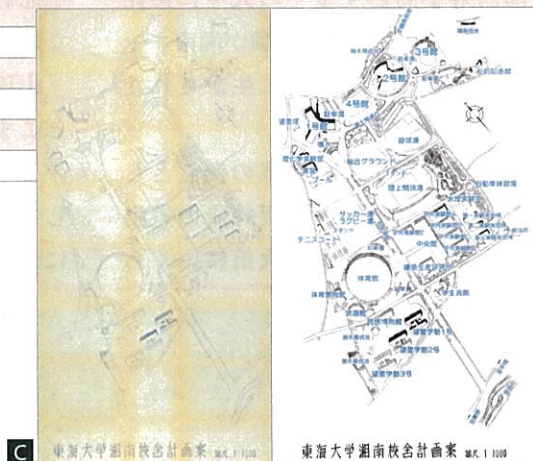
この他に山田守がデザインし

た円形ドーム建築は、学生時代の卒業設計である「国際労働協会」（1920年）があるだけです。山田は建築家を志した当初の思いを、この体育館のデザインに込めたのかもしれませんが。

どちらも建設には至りませんでした。幻の体育館の模型は山田の獨創性を物語る貴重な資料といえるでしょう。

学園史資料センター主催展示会「キャンパスの記憶—湘南キャンパスの歴史—」展示物品リスト

	物品名	発行・製作時期	備考
① 前史 60年代	東海大学湘南校舎計画案(複製) C	1965年	
	『東海大学新聞』第102号	1966年11月15日	建学祭、武道館落成に関する記事
	2号館落成式プログラム	1964年12月12日	
	『東海』第2号	1964年12月12日	2号館竣工に関する記事
	東海大学武道館落成記念メダル	1966年	
	『東海』第10号	1967年2月15日	3号館・松前会館落成に関する記事
	4号館落成式プログラム	1967年11月1日	
	東海大学創立25周年記念メダル	1967年11月	
	総合体育館落成記念メダル	1968年8月	
	第5回学園オリンピック参加メダル	1969年8月	
	第8回学園オリンピック参加メダル	1972年8月	
	東海大学歌集	—	レコード、カセットテープ、CDの各種
	松前重義著『現代文明論』東海大学出版会刊	1977年2月20日	同名講義のテキスト(改訂版)。初版は1963年5月発行
	学生服 A	—	上着のみ。校章があしらわれた襟章とボタンが付属
② 70年代 未来へ	『東海』第65号	1983年12月20日	松前記念館竣工に関する記事
	松前記念館パンフレット	1983年ごろ	
	12号館落成記念リーフレット	1986年6月30日	
	13号館落成記念リーフレット	1988年3月15日	
	『東海』第84号	1988年7月15日	13号館竣工に関する記事
	『東海』第102号	1992年12月15日	14号館竣工式に関する記事
	建学50周年記念 東海大学「学園50年の歩み」	1992年10月	
	15号館竣工式パンフレット	1995年4月5日	
	18号館竣工式リーフレット	2014年3月7日	
	東海大学湘南校舎測量図(複製)	1974年7月	工学部土木工学科所蔵
③ 学生食堂 の変遷	『東海ランチャー協会案内ー』	1970年4月	食堂紹介に関するページ
	『1969年度 オリエンテーション誌』	1969年4月	協会紹介、2号館地下食堂に関するページ
	『1974年度 オリエンテーション誌』	1974年4月	キャンパス周辺の飲食店一覧・地図を掲載したページ
	『東海』第92号	1990年7月15日	ログハウスオープンに関する記事
	『BaB News』第13号	1993年1月7日	14号館食堂「カフェラウンジ14」特集
	『東海』第130号	2002年4月20日	COM SQUARE オープンに関する記事
	『TOKAI』第154号	2009年4月1日	カフェテラスオープンに関する記事
	『東海大学新聞』第60号	1962年10月15日	代々木校舎4号館食堂改装に関する広告
	『東海大学新聞』第416号	1983年7月20日	11号館食堂メニューに関する記事
	『BaB News』第2号	1989年7月1日	食堂人気メニューに関する記事
同窓会館内食堂の看板 B	—	幅80cm×高さ8.5cm×奥行17cm	
④ 航空写真	湘南キャンパス周辺航空写真	1964年7月24日	国土地理院
	湘南キャンパス周辺航空写真	1967年6月1日	国土地理院
	湘南キャンパス周辺航空写真	1972年8月12日	国土地理院
	湘南キャンパス周辺航空写真	2004年11月4日	国土地理院
⑤ 校舎石膏模型	1号館石膏模型	1962年ごろ	
	2号館石膏模型	1964年ごろ	
	3号館・松前会館石膏模型	1966年ごろ	
	4号館石膏模型	1967年ごろ	
	武道館石膏模型	1966年ごろ	
	屋内体育館石膏模型	1965年ごろ	



キャンパスの記憶—湘南キャンパスの歴史—

2016年4月20日発行

編集・発行 学校法人東海大学学園史資料センター
 協力 東海大学教育開発研究センター
 印刷 株式会社東海教育研究所

学校法人東海大学 学園史資料センター

〒259-1292

神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学湘南キャンパス5号館2階

電話 0463-50-2450 FAX 0463-50-2449

E-Mail: shiryo-center@tsc.u-tokai.ac.jp

URL: http://www.pr.tokai.ac.jp/gsc/